

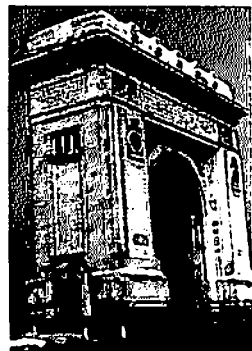
日本の杖道愛好者の数は、年々増え続けているというが、国外でもその数は増加の傾向にあるようだ。長野県に住む

杖道教士七段・太田安昭氏は、先頃、武道使節団の一員としてヨーロッパに渡り、

45日間にわたって外国の杖道愛好者に指導を行なってきた。

帰国後、

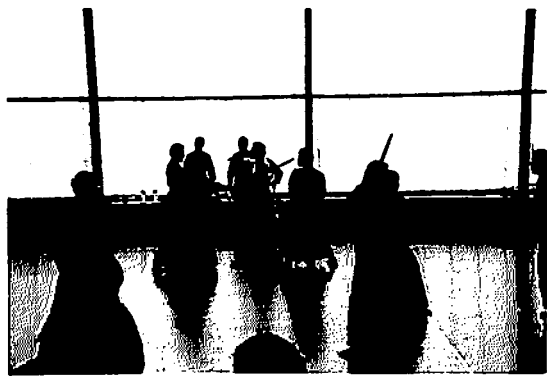
寄せられた太田氏の文面からは、ヨーロッパの杖道事情が伝わってくる。



ルーマニア・ブカレストの凱門



大道芸を見せる女性（ドイツ・ケルン）



フランス杖道講習会の模様



太田安昭氏。初日、ルーマニアでの夕食にて

ヨーロッパ

杖道指導の旅

昨年（平成5年）11月、東京久明館道場の久保昭先生より東京絃武館道場に、「国際交流基金より予算が下りたのでルーマニアへ杖道指導使節団として杖道の立場で参加して欲しい」と

という依頼があった。私は長野県松本市に在住し、電機会社に勤める典型的なサラリーマンであるため「夢の話」として受け取ったが、幸い会社の理解と寛大な処置により、今回の「欧州・杖道指導の旅」が実現した。

ルーマニア→ハンガリー→オーストリア→ドイツ→フランスを訪問する45日間の旅である。

●ルーマニア
杖道デモンストレーションで
観衆のサイン責めにあう

ルーマニアには2月20日～3月10日まで滞在し、団長、酒井勝先生（剣道教士七段）を中心に久保昭先生（剣道教士七段）、居合道教士七段、浅見升三先生（剣道五段、居合道五段）、小杉耐三先生（剣道四段、益子芳行・岩崎晴彦両氏（剣道三段）、そして杖道より私・太田と高久敏男氏（杖道五段）の計8名が参加した。

初めて見るルーマニアは、4年前の革命のイメージとはかけ離れ、活気にあふれて



美しいグラーツの街なみ



ブタペストでの講習会



ドイツのメルヘン通りから臨む白島の城

杖道教士七段
太田安昭=記

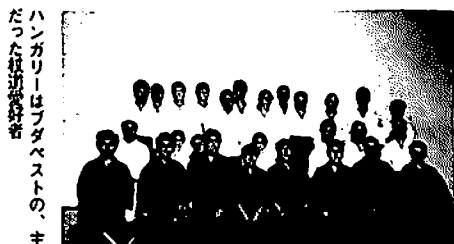
特別寄稿



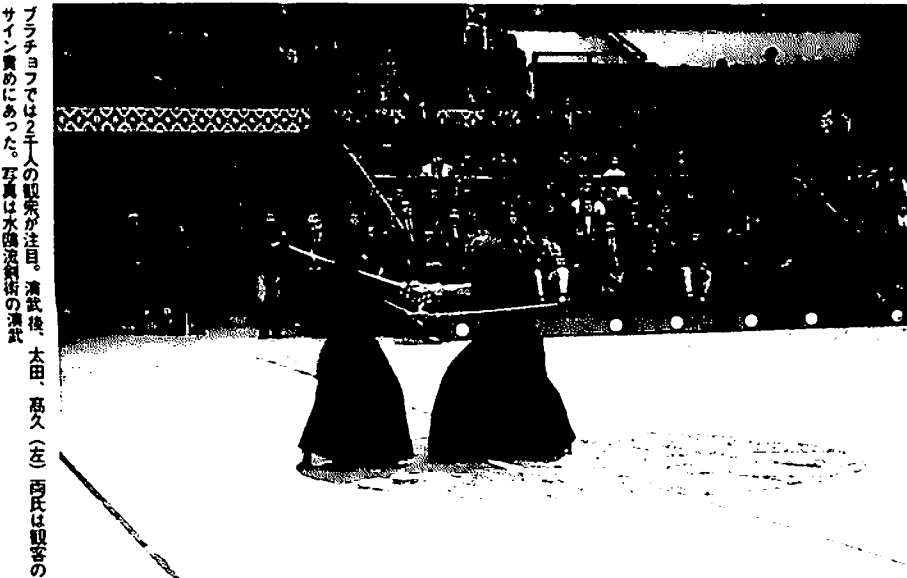
ルーマニアの日本大使館の前で。左から岩崎氏、浅見氏、天本氏、太田氏、高久氏、小杉氏、益子氏、久保氏。天本氏は自費を投じてルーマニアで剣道発展に貢献。ほかは武道使節団員。団長の酒井氏はこののち合流した



ヤーシにて約千人が見守る中、杖道の演武を行なった太田、高久(左)両氏



ハンガリーはブダペストの、主だった杖道演武者



ブラチヨフでは2千人の観衆が注目。演武後、サイン賣めにあった。写真は水鏡流剣術の演武



ルーマニアのヤーシから50キロほど離れたところにある市場

いた。

人々は、自由に商売を行なっており、フアーストフーズの店も西側と同じシステムでそここにあり、新旧のシステムが入り乱れていた。街の店のウインドウはそれなりに飾り立てられ、露店にもあふれんばかりに品物が置かれ物の不自由さを感じなかつた。

しかし、これは「富める国・日本」から来た私たちの感覚で、ルーマニアの人々から見ると大変である。彼らの平均的な月給は円換算で五千円、彼らは生活するのが精一杯であり、また、貧富の差も大きいようである。

旧・共産党ビルの脇にあった蜂の巣状の銃弾痕を残すビルと、そのすぐ脇の通りにぎやかさの対比が何ともいえず、これからの発展を願わずにはいられなくなった。このような国において、一銭にもならない剣道を行なうことがいかに大変なことかは想像にたかたか。が、実際には、熱心に稽古する数十人の集団が首都・ブカレストを中心におり、彼らは毎日仕事を終えてから稽古に集まって来るのである。

稽古は、裸足になり雑巾がけから始まる。体育館を土足で使用するこの国において、砂ほこりの立つ床を四つんばいになって雑巾がけすることは、彼らのプライドという面を考へてもとれただけたいへんなことか、話には聞いていたが、その姿を目のあたりにして頭が下がる思いをした。

剣道の稽古は基本の素振り、打ち込みに主体を置き、決して試合に勝つための稽古はしておらず、彼らもそれに満足し、胸を張っていた。また、このうちの何人かは居合もしており、全剣連制定形十本を抜ける。技術的なレベルは決して高いとは言えないが、稽古に対する意欲と素直な姿勢は、日本で失われたものを、ここルーマニアで

見た思いをした。自費を投じて彼らをここまで育て、指導されてきた津島冠治先生、天本浩里先生に、あらためて敬意を表するところでありませう。

私たちが訪問団はブカレストに到着後、24日まで滞在し、ヤーシ、ブラチヨフを訪問し、3月4日、再びブカレストに戻った。

今回は、剣道、居合道のほか、私たちの杖道が加わって稽古、指導をするともに、デモンストレーションにおいては古伝の各種武術を披露。その反響の大きさには驚き、責任さを感じた。とくにブラチヨフでは市長さんが陣頭に立ち、市を上げての歓迎を受け、デモンストレーションでは会場に約2000人の観衆が集まった。終了後、観客が押し寄せサイン貰めとなり、予定の時間が1時間も遅れるハブニングまで起こった。

ルーマニアにおいて、杖道の紹介は今回が初めてであった。彼らはいへん興味を持ったようで、そのうち7人が通常の稽古とは別に、自ら私たちに特別稽古を申し込み、旅行に同行して訪問した先々で稽古の場所を探し、時間をやりくりして熱心に稽古した。彼らには熱意とまっすぐさがあり、技の覚えも早く、わずか10回ほどの稽古で形までこなせるようになり、教えていた私が驚くほどであった。

今後、ルーマニアにおいて杖道が根付き、発展することを希望するとともに、私も微力ながら力を尽くしたいと思っている。

ルーマニアに於ける全日程が終了した3月10日、久保先生を中心にした一団が早朝テルアピブへ、同日の昼ごろ、酒井先生と岩崎君がベルリンに、それぞれ次の指導のため旅立って行った。私と高久氏の2名は、この夜、杖道を指

導（19時30分〜21時）し、ブカレスト発23時30分の夜行列車に乗り、次の訪問地・ハンガリーのブダペストへ向かった。

●ハンガリー 町でたったひとりの愛好者は 素晴らしい杖の形を見せた

翌、3月11日の13時20分にブダペストに着いた。駅にはヤノシユ氏、オキ氏の2名が迎えに来てくれていた。この国では、彼らを中心として杖道の稽古が行なわれているのである。ハンガリーで杖道が行なわれているようになったのは、3年前、ブダペストで開催された「日本フェスティバル」に絃武館道場館長・松村重敏先生（教士八段）と今回同行した高久氏（五段）が参加し杖道の紹介と指導をしたのがきっかけで、その折、高久氏が約1カ月当地に残り指導して以来根付くようになった。その後、彼らは、次の訪問先・オーストリアで杖道指導をするミカエル氏（三段）の指導を年に数回受けている。そのミカエル氏は、フランスのレニエ・ジャンビエール氏（教士七段）の弟子にあたり、レニエ氏は絃武館道場の門人であり、松村先生の弟子に当たる。このような関係もあって、今回の訪問が実現したのである。

そのブダペストには3月11日、15日まで滞在。到着した夜から、さっそく稽古を開始した。滞在期間中、稽古には初心者17名を含め、約30名が常時参加し熱心に稽古した。

彼ら杖道を稽古している者のほとんどが制定形六本目まで正確に覚えていて、しっかりと杖道を行なっているのには感動した。年に数回の指導とあって形の本数こそ進んでいないが、教わったことを正確に稽古しているのである。いわゆる「くずれた杖道」と思われる人はひとりもいなかった。

彼らは段を持つていない。審査を受けに外国まで行く余裕がないからである。それにも関わらず、彼らは師弟関係を守り、数少ない指導の機会を精一杯生かして稽古を続けていた。

今回の指導に先立ち、彼らの希望を聞いたところ、「基本をしつかり教えて欲しい。そして、悪い所を直して欲しい」であった。7回の稽古時間が用意されたが、彼らの希望をかなえるのに精一杯で、それ以上先に進むことはできなかった。また、初心者には基本の半分の六本と、制定形三本を指導した。

ブダペストでは、剣道を指導している山地征典先生と、成年海外協力隊の阿部哲也先生にお会いすることができ、剣道の稽古の前、30分ほどお時間をいただき、杖道と各種古武術の演武を行なった。そして、そ

の夜遅くまで歓談。山地先生、阿部先生はお互いに協力し合いハンガリーで熱心に剣道を指導しておられるが、今まで杖道愛好家とは直接コンタクトがなかった模様で、今回つながりができたことで、今後の杖道発展が良い方向に向かうものと期待している。

ブダペストで15日昼の12時まで稽古し、セゲドの近くにある小さな町・マコまで車で約3時間移動した。マコでは合気道を教えているイムラ氏が杖道を稽古している。彼はブダペストのヤノシユ氏と一緒に杖道を始めた友人であり、ヤノシユ氏の招待でこの地に来た。

マコで2日稽古するあいだ、地方テレビの取材を受け、そこで杖道の演武も行なった。また、セゲドに剣道の指導で派遣されている青年海外協力隊の榎先生が2日間に

渡って訪れ、親しく歓談することができた。17日はオーストリア国境の町・ゾンバトヘイに移動。この地には、たった一人杖道の稽古を続けているガホル氏という人がいる。彼も3年前に杖道を始めたものであるが、年に数回ブダペストに行き、良い環境の中で、教わった制定形六本を素晴らしい環境にありながら、その中で全く崩れることなく稽古しているのである。

ハンガリーは現在、旧西側とまったく同じように自由であり、物も豊富で、そこに住んでいる人々も不自由なく生活しているように思えた。3年前に訪問している高久氏によると「様変わりしている」そうだ。

しかし、経済力の差は大きく、隣の国（町）オーストリアに稽古に行くことすらできない。まして、昇段審査を外国で受けることなどほど遠い環境にある。渡り歩いてさまざまな先生に教えるをうよううな「つまみ食い」な稽古をすることなく、数少ない指導者の教えを忠実に守り、先を急がず稽古を続けている。彼らには「つまみ食いの稽古が遠回りだ」ということが理解できていようであった。このような姿を見て、今の日本といわず、私自身が大いに反省させられた。

●オーストリア

山城を望む美しい街に 杖の激しい気合が響き渡った

3月18日16時30分、ゾンバトヘイを出発し、列車で約2時間かけてオーストリアのグラーツに着いた。グラーツの街は歴史のある山城を中心に、赤い瓦の家並が続くきれいな落ち着いた街である。

ここには、杖道愛好家が30人ほどおり、前にも触れたミカエル氏が中心となり、稽



フランス全土をはじめドイツ、オーストリア、ベルギーなどから約90名が参加した杖道講習会の模様



第8回フランス杖道大会の入賞者に、松村重敏氏（杖道教士八段）がトロフィーを授与。松村氏の奥はレニエ・ジャンビエール氏

オーストリア・グラーツでの稽古風景



古をしている。彼らはフランスのレニエ・ジャンピエール氏の指導を受け、フランス剣道連盟に所属してたびたびパリまで稽古に行っているようである。また、彼らの中には、剣道、居合道をあわせて稽古している者が数多くいた。

ここでは、19、20日(土、日)の二日間、講習会を行なった。時間の制約があり、基本と制定形六本の指導にとどまったが、気合の入ったしっかりした稽古をすることができた。

しかし、ここでもハンガリー同様、常時指導者がいないため、杖をしっかりと使っているのに先に進めない現実がある。限られた環境の中、永い者は10年近く一生懸命稽古を続けている。

21日、古伝の特別稽古を行ない、22日朝グラーツをあとにして、ウィーンに向かった。22、23日はウィーンにおいて、この旅中唯一のプライベート・タイムを過ごし、24日朝の列車でドイツのミュンヘンに移動。

●ドイツ ケルンで3人の愛好者と 2日間、徹底的に稽古に励む

ミュンヘンでは長野弘路先生(合気道)が中心となり、数十人が稽古していた。この杖道は、元警視庁助教の椎屋光男先生(杖道教士七段)が3年間に渡って毎年、10日程度の講習会を行ない指導されて来た。私たちは、椎屋先生のご紹介でこの地

を訪れ、約20人の杖道愛好家とともに稽古会を行なうことができ、長野先生にはたいへんお世話になった。

3月27日朝、ミュンヘンをあとにし、7時間列車に乗って夕方6時、ケルンに着いた。ケルン訪問のきっかけは、日本を出発する直前、居合道の審査のために訪日していたフーベルト氏に会ったことで、その折に稽古の約束をしていた。

駅にはフーベルト氏とソフィー氏の2名が迎えに来ており、そのまま道場直行した。道場にはクラウス氏が待っていて、さっそく3人と稽古を行なった。

フーベルト氏は居合道を、ソフィー氏は剣道をあわせて稽古しており、杖道は前述したフランスのレニエ・ジャンピエール氏の指導を受けている。

ここ、ケルンでは27、28日、あわせて3回の稽古を行なうことができた。たった3人につけた稽古会ではあったが、実に充実した内容であった。

また、ルーマニアに同行した酒井勝先生(団長)のご紹介により、この地で剣道を指導されている清水幸雄先生とお会いする機会を得て、剣道の稽古の合間に杖道の演武を行ない、その夜は親しく懇談した。

●フランス 盛会だった、講習会と 第8回フランス杖道大会

3月29日、最終目的地のバリへ向かった。

フランスでは、東京・絃武館道場で修業したレニエ・ジャンピエール氏とブレス・ジエラルド氏(六段)が、帰国後、フランスの人々に杖道を指導し、発展させている。その後、彼らの師匠である松村重敏先生が、12年に渡って時折パリ出向き、フランスの愛好者を育ててきた。私も9年前、松村先生に同行し、指導をした経緯がある。今では、四段8人を筆頭に、有段者が育ち、フランス各地で活躍している。

パリでは4月2日、4日の3日間、フランス剣道連盟の主催で「杖道講習会」が行なわれており、折しも講師に松村重敏先生が招かれ、私たちもこれに合流することができた。

フランス剣道連盟主催の講習会に先立ち、3月31日と4月1日の2日間、神道無想流杖術の稽古会も行なわれ、フランス、オーストリアなどから古伝を稽古している者約30人が集まり、気迫のこもった稽古会も行なわれていた。

4月2、4日の杖道講習会にはフランス全土を始め、オーストリア、ドイツ、ベルギーなどから約90名が参加。連日熱心に受講していた。

3日の午後には、「第8回フランス杖道大会」が行なわれ、終了後に古伝の技、並びに各種古武術の演武を行なった。4日の午後には昇段審査が行なわれ、現在フランスで受けられる最高段位である四段を5名が受審、そのうち3名が合格した。

参加者の中には、私たちが回ってきたオ

ーストリアのミカエル氏ら、ドイツのフーベルト氏らの顔もあり、フランス各地に、そしてオーストリア、ドイツに核となる指導者が育ちつつあることが実感できた。また、彼らは後進の育成にも努力している。年々、参加人数が増え続ける杖道講習会は、今年もみな技が上達しており、活気と気合に満ちた内容であった。

私と高久氏は講習会終了後、4月4日の午後4時、パリ・ドゴール空港をあとに帰国の途に着いた。松村先生は第9回世界剣道選手権大会でレニエ氏と演武を行なうため、4月10日までパリに滞在した。

*

今回の欧州5カ国の旅、計45日間は、日数的には長かったが指導にはあまりにも短い旅であった。訪問したいずれの国の人々も、指導を受ける機会に恵まれていなかった。しかし、私の会った人たちはみな師弟関係を守り、連絡を取り合っており、数少ない指導の機会を万難を排して受講し、受けた教えを忠実に守って休むことなく稽古を続けていた。この姿を目の当たりにし、自身自身の稽古を振り返ると恥ずかしいものさえ感じる。

また、指導する立場から見ると一度指導したことは修正が効かない、ということも痛感。あらためて指導者としての責任の重さを感じた旅であった。

(1984年4月)

ヨーロッパ 杖道指導の旅